

私 の 心 に 残 つ た 本



時空を旅する遺伝子

医学部教授
(生物学)

小川 久光

この年になるまで数え切れないほどの本を読んできた。学生の頃、ようやく定職に就いた頃、研究に没頭した頃、と時代時代に応じてそれなりの感銘を受けた本があったはずなのだが、いざ、思い出そうとするほとんど出てこない。ようやくいくつか思い出し、それらの本を紐解いてみたものの、過去の自分を思い起こすだけで現在の自分にはあまり響かない。食べ物に対する感覚と似ていて、年代によって嗜好が変わってくる。若いときには金もないのに血のしたたるようなビフテキを願望したが、この年になるとコレステロールが高い、尿酸値が高い、と食事制限を考慮せざるを得なくなり、お茶漬けがいいと思ったりする。というわけで、心に残ったというほどではないが、たまたま最近手にした1冊の本を紹介することにする。

タイトルは「時空を旅する遺伝子」で、よくテレビや一般書でも取り上げられるようなハイライトを解説した分子生物学入門の読み物である。この手の本はその分野の専門家が啓蒙書として書くことが多いが、この著者はちょっと変わっている。大学院時代までは分子生物学を専攻していたが、その後、180度方向転換して人材育成ビジネスの世界で活躍している。生命と人間社会の両方を一定レベルまで知ったその経験がこの本の内容に反映している。生物学を題材に取りながら教科書や専門書とは違って、個人や組織のあり方、社会について語っているところが面白い。

紹介されている題材は、免疫、ミトコンドリア、アポトーシス、イントロン、テロメア、進化など、ポピュラーになったテーマばかり。そのいくつかをのぞいてみよう。「敵対的買収をする生命」とつけられた章では、ミトコンドリア起源や遺伝子水平移動の現象を解説し、我々人類は異なる生命体同士のM&A（吸収合併）の産物であり、敵対する生物の合体が進化のエネルギーを生んだと結論づけている。そして、日常生活やビジネスにおいて、ともすると保守・安定を無意識的に求めがちだが、生命の英知から「ダイナミズム」を活用しようと導く。近頃話題になっているM&Aが身近なものになってくる。「遺伝子の雑音イントロン」とつけられた章では、遺伝子の中にイントロンをもたない原核生物ともつ真核生物の生物学的な解説から

「時空を旅する遺伝子」

西田 徹 著

(日経BP社)

「4つの教訓」を引き出し、トヨタ自動車（「ムリ・ムダ・ムラ」を徹底排除し、混沌を否定し秩序を善しとする会社）と米3M社（「サボること」「指示命令系統に背くこと」といった混沌を、一部容認している会社）の事例をあげ、混沌から価値を生むための「コツ」を紹介している。私が組織をつくるならどのように選ぼうか。「命の回数券ヘイフリック限界」とつけられた章では、有限な個体レベルの生とテロメアについて解説し、真核生物の死には未来にバトンを渡すというポジティブな意味があると説く。そして企業の死（倒産）の際も、無理に資金を注入して延命するよりは、よりよい死を迎えるための「ホスピス」を用意したほうがいい、という。政治・経済界への提言だ。このように章ごとに生物学的解説をし人間社会と対比させる。最先端の分子生物学からの発想は、既成の常識にとらわれない柔らかな考え方をもたらしてくれることを実感させ、社会人にピンとくるようなビジネスや人間社会での比喩や事例の駆使から、生命でも人間社会でも不变の「英知」があると主張している。今後、生物学はさらに進歩しその都度いろいろな解釈が加えられるることは間違いないが、それと同時に生命の謎はさらに深まるかもしれない。生命の誕生以来、約40億年の長い歴史を旅してきたDNAは、命のバトンを未来の世代に引き継ぐために何をしてきたか、最先端分子生物学の不思議ワールドは実に面白いと思った。

（当館所蔵 分類番号464）

